
銀魂 ~最強の二人~

ジャン魂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂～最強の二人～

【Zコード】

N7976U

【作者名】

ジャン魂

【あらすじ】

宇宙の喧嘩師と地球の喧嘩師が手を組んだ！

目的は違えど標的は同じ・・・

かぶき町を・・・江戸を守れ！

プロローグ 宇宙と地球の喧嘩師（前書き）

“いつもジャン魂です。

このお話は、警告はありませんでしたが、少し残酷描写が含まれます。（予定ですが）でも、よっぽど苦手な人じゃない限り見れると思つので警告はしませんでした

なので大体の人は安心してじっくり覗くください。
それではどうぞ！

プロローグ 宇宙と地球の喧嘩節

……………」は宇宙海賊春雨戦艦内。処刑広間にて。

「デカイ借りができるやつたね。仕方ない。アンタと殺り合ひのまつばげで中止にしてよ

それに……アンタと一緒に地獄廻りも楽しもうだじ

「フン

「あい。手始めにじいからこいひか? やつぱつ……

侍の星?」

「…………だな」

「アンタは何のために戦う?」

「…………俺はただ…………壊すだけだ。
すべてを」

「ふーん…………よし。一緒に行こうか?」

「アンタと一緒に地獄廻りさせよ?」

「…………好物にして」

「いいんスか晋介様！そんな奴信用してー。」

「…………まあいいじゃねえか」

「じつ…………晋介様がやつおつしゃるなり…………」

「面白こでりやるな。面白くでりやる」

「晋介！」

「おこおこマジかよウヒーヒーハー。アンタ海賊王になるんじやなかつたか？」

「それこもまかず寺の星を消すこと…………。
それに仲間はまことまうがこいこでしょー」

「ふん。勝手にじひー。」

「黙つてるシスロココン」

「あの…………私を許してませんか晋さん」

「私はロココンジやなコツハリーストアラーー。」

この「人の目的はいかに・・・？」

プロローグ 宇宙と地球の喧嘩師（後書き）

本編は一話から。

今回もうひとつこの願いいたします・・・

第一話 こつもの日常

万事屋。

「」は「万事屋銀ちゃん」と書いたの何でも屋。

この店は基本何の依頼も入ってこず、たいていの時間は暇をしているのが日常といつてもいい。

「銀ちゃん。 おなか減ったアル」

今は昼飯時。 だが、やっせんは仕事が少なすぎるので金がまつたくとつていいほどない。

「はあ~。 どうしたものか」

「ホントにいいわね。 」のまじや私達食え死んでしまつアル」

「銀ちゃん。 どうしましょつか?」

「新八ん家はあ? お前の家ならなんかねエの?」

「残念ですけど僕んちには姉上がいます。 姉上が僕がお腹をすかせてるつて知つたら銀さん殺されますよ? それに姉上がご飯を作つたら・・・・・」

「・・・・・だよなあ」

「あれは私もいやアル!」

誰だつて嫌だらうといつのは、新八の姉、志村妙の卵料理のことである。

あれをまともに食べられるものはそういうい。

弟である新八もそれを食べて田を悪くしたらしい。

「じゃあどうしましようか僕達。もつ何も食べるものありませんよ。・・・

「ああ・・・・・・」

「お腹減ったアル・・・・・・」

また、このよつた会話を繰り広げているのが日常である。

三人はしばらく考え込んだ。

「ああ～」

「どうしよ・・・・・・」

「お腹減ったアルよ・・・。こんな時は定春の散歩にでもみんなで行くアル。知り合いに合づかもしれないね」

「それだーお前珍しく頭働くじゃねえかーー！」

「珍しくとは何ネーー！」

「じゃあ定春つれていきましょう一人とも

「しかたねえな」

「じゃ行くアル！」

三人は神楽の提案により、三人で万事屋の飼い犬である「定春」の散歩に行くことになったのであった。

第一話 こつもの口算して（後編）

れこしょはまあこんな感じで。

貰にいかせて頂きます。

じやあこれからも宜しくお願いします。

第一話 着信

出来事の前夜。

「…貴様誰だ」

「クククツ…ヅラア。」

「貴様たか…・・・

「ブシィイイイイ！…！」

「…た…高杉…貴様！」

「クツクツクツ…悪いいなヅラア」

「ぬ…」

ドタッ

桂はその場に倒れこんだ。

その体の辺りは、おびただしい量の血であふれている。

「俺はただ壊すだけだ。この…腐つた世界を。クツクツク…」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ハアー・・・誰にも会わないアルね」

「クウウウン・・・・」

「定春もお腹すいてるアル。どりし日銀ちやん?」

定春が元氣のない声で鳴くのをきくと神楽が言つた。

「んな」と言つたつてよお…ねえもんはねえ

「だつてこのままじや…」

「とつあえず一回座りませんか?」

「やうするアル

新八の提案に神楽が乗り、銀時もそれにじぶじぶついていった。

そして向かつたのは河川敷。

三人はそこに寝転がる体勢をとつた。

そして30分後。

『ハアー…』

三人のため息がかさなつたそのとき

「「」んなとこりで何してるんですかイ旦那ア」

「おー万事屋ーそれに新ハ君ーこんなとこりにいたのかー」

それを見た瞬間三人の目つきが変わった。

「……まつたく、なんでお前らはこいつもこいつも

「いりやーをまアル」

「あつがとつ」れこまゆー」

「ハコラも役に立つな」

「誰がハコラだーー俺は近藤だよーー」

「まあまあ落ち着け近藤さん。俺らにこまよ目的があつただろ?」

「せうでむか。土方のこつとおりでむか。これでこつと役田は終わつでむか。わつやと副長を辞めりとして死ね土方」

「……！ てんめえ……」

「まてまて落ち着けトシー！」

今度は三人の言い合いが始まってしまった。

「あのー… それで今『用がある』とか言つてませんでした? 僕らにですか?」

新八がその三人を止めに入り、話を元に戻す。

「おおその話だつたな! ちょっと聞いてくれるか?」

「依頼か? なら金取るぞ」

「今のでーー！」

「だめだ。もつとよーせ。」

「クソ! こつらーーー もつこーいや。それでいいから話すぞ」

「何アルか一体?」

近藤の表情がうつて変わったので三人は不思議に思い、顔を見合わせる。

「お前ら… 撮夷志士は知ってるな?」

「撮夷志士?… ああ」

攘夷志士。それは開国の折、最後まで侍の国を守りととして戦つたものたちの生き残りである。

そして20年たつた今もいまだに活動を続いている集団だ。

「その攘夷志士の動きがな…最近活発になってきたんだ」

「ハア？」

近藤の言つて「」とがよく分からず、三人はまた顔を合わせる。

「要するにだ、さうきん攘夷志士の活動が著しくなつていて、止めるのに苦労してゐるんだ」

「俺らにそれを止めると、まつたやんつやけにおかしくね。それこそお前らの仕事だらうがー」

「まてまて。確かにそれもあるが、それだけじゃない。」

「あ？」

「それだけじゃなつてやうこいつとマルか？」

「それはだな…」

近藤の表情がまたさうに真剣な表情に変わった。

「その志士じも、じつやう過激派の連中が中心なんだ。要するに…鬼兵隊。

…高杉だ

「…」

銀時や神楽や新ハの表情がこれまでとは変わって真剣な表情になる。

「高杉つてー確かに紅桜のときの…」

「ああ。お前らは確かに桂と組んで紅桜の計画を潰したんだったな？」

土方が口を開く。

「そつアル。私がすゞしい活躍だったネ。」

「毛ほども聞いてませんゼイ？そんなこと」

「ウツセコネバカサドー。お前らも何もしてないネ！」

「春雨に手を出せるわけねえだろイ？」

「フン…」

「いつものような二人の口げんかもあり、話はそりに進む。

「それでだな、詳しいことは今山崎に調べさせてこる。

だからまたお願ひするかもしねな。今日のところは…」

ブルルルルツ…！

そのとおり、ポケットに入っていた土方の携帯がなる。

「なんだ？…おお山崎だ。」

土方はそのまま電話に出る。

「ちゅうとまぢか。」

「ああ」

「で？俺にどういふことへ？」

「高杉ならお前詳しいんだろ？だから聞くのと聞いてな。」

「詳しこうひいひむせんなんじゅねえよ。それこそあんなやつ…」

その時はそれでいた土方が戻つて来る。

「おこ近藤さん。山崎が妙なことを言つてやがる。」

「よし代われ。おこ山崎。俺に話してみや」

『局長！大変なんですよ。ひつやう辻斬りが…被害者は…』

「ひつやうしたんですか近藤さん？」

『詳しこうとはまた…』

「…おお」

「どうしたアルかゴリ」

「山崎がいつてたんだが…」

それをきいた瞬間、三人の顔が一気に驚きの顔になる」ととなる。

第一話 着信（後書き）

感想評価アドバイスなどがあれば、ぜひーー！

第三話 始まり

「桂が…やられた」

それを近藤が告げた瞬間、万事屋三人が固まる。

「ハ…何言つてるアルかゴリ?」

「そうですね…い、言つていいことと悪いことが有りますよ?」

「冗談だと笑つてほしかつたが、近藤の表情は一切の変化なし。

「昨日の夜の」とりしい。人影のない林道でだ。辻斬りだ

「…そんな…桂さんがそう簡単に…」

「おいおい冗談だろ?んなわけねえつて」

これまで何も口にしなかった銀時がいつもと変わらない表情で言葉を発する。

「万事屋。気持ちは分かるが…」

「…新八、神楽。帰るぞ」

「ま、待つて三銀ちゃん!」の話聞かないと…」

「銀さん!」

「銀ちゃん…」

「じゃ」

それだけ言って手をひらひらさせて、その場を去つていった。

「…銀ちゃん」

「…銀ちゃん」

「少し酷だったか?トシ」

「ああ…でも事実だし」

「田那と桂の奴は古いんでしょ?…だつたらそれとしどこでやりや
しよ?」

「総悟…まあそうだな」

「でも…あんな銀ちゃん見たことない田。心配アル」

「大丈夫ですか。田那は田那なりに何かあるはずですか」

「…そりだよ神楽ちゃん。銀さんなら…」

「…ウン」

「…でも、桂さんが斬られたって…一体どうこうとなんですか?」

新ハが話を変える。

「ああ……俺達にも分からない。だが誰かに突然斬られたといつのは間違いないだろ?」

「いくら穏健派とはいって、攘夷戦争に参加してた奴でもあるし、春雨と鬼兵隊相手に互角にやりあつただけの実力は兼ね備えているはずだ。一騎打ちで殺つたとすれば相当の実力者だな」

「確かにそうですねイ。ここはやはり不意打ちとみて間違いないですかイ?」

「……だろ? だが分からないとこも多ー。山崎に……いや、真選組総出で調べ上げるぞ! いいなトシ!」

「……わかつた手配しておく」

「眼鏡にチャイナ。今日のところはこれでいいですか。また何かあるかも知れね? けどな」

「分かりました。それじゃあ僕達は……行こう! 神楽ちゃん。」

「……わかつたアル」

そして、神楽と新ハは店を出てもと来た道を歩き出した。

『桂が斬られた』

ここからこの事件が始まつていいく。

第四話 起いひこむじと

「ねえ新八」

「なに神楽ちゃん?」

真選組の3人と別れてからの帰り道で、突然神楽が口を開く。

「ジラ…ホントに死んじやつたアルか? 銀ちゃんは? 銀ちゃんはどうなつたね?」

「……分からないわ。でも分かる」とは一つだよ」

「?」

「桂さんは… そう簡単には死ななこと。銀さんだってそんなにやわじやないよ…大丈夫!」

「… そうアルな…」

神楽はやはり銀時が桂のことを聞いてから元気がない。

「… 神楽ちゃん?」

「なんでもないねー あ帰るアル!」

「… そうだね」

* * * * *

一方の真選組の3人は、店を出て帰ってきた。

「どうだ山崎？」

「あつ副長ー！それが詳しいことが分かりましたー！」

「やるじゃねえか。それでどうなんだ？」

「それが」

・・・・・・・・・・

「… そうか。それはヤベえな」

「はい……」のままでは

ガラガラッ

「おこトシに山崎ー！どんな感じだ？」

近藤が部屋に入ってきた。そしてもう一言葉を続ける。

「近藤さんか。それがな……結構ヤベえんだ」

「……なるほどな。これは……」

「どうじですかイ？」

「うわーー・総悟！ーーいつの間にいやがつたんだーー？」

「土方さんのが入ってきたときからでね。話は全部聞きやした」

「やうか。なら話は早い。どうするか。今から考えるが」

近藤がそういうと、土方は屯所内の人間をすべて集め、計画会議を行つた。

「そりと決まればどうあんにも知らせとかなきやいけねえよな？」

「ああそりしないと……」

何が起じているのか？

それはとんでもないことが起きてるのかもしれない……

「オイヤーの」

「あ？」

町を歩く浪人に話しかけたのは……

銀時。

「お前は……確か桂さんの昔の…」

「あなた。聞きてえ」とがあるんだが」

「なんだ？」

「ジラの」とだ

「桂さんの…なんだ？」

「斬られたって本当か？」

「…分からねえんだ。だが分かる」とは…

姿がみえねえんだ

「姿が見えない？」

「ああ。Hリザベスさんは残つてゐる。

今だに桂さんを探し回つてゐるがな。」

「なるほどだ。それで？あてはあつたのか？」

「あつてこつたら……その例の辻斬り事件くらこしか…」

「……」

「高杉だ！」

「……高杉？」

「きつと……きつとあいつが何かかかわってるに違いねえ……アイツら過激派は俺らが邪魔だったんだ！だからあいつがかかわってるに違いねえ！」

「わうなのか？」

「そうだー旦那！アンタなら高杉のことー。」

「…………」

――『最近攘夷志士の動きが激しい。高杉が首謀だ』

「……ありがとさん。じゃあがんばれや。」

「えつー？……じゃあこれで

銀時はそつこい残して、その場を去った。

「…………なるほどだな」

第五話 ハンペー

「 」

「 」

夜の11時を回つた。

だが、まだ銀時が帰つてこないのだ。

「遅いアルよ銀ちゃん。 いつたいビード油つってるネーーー。」

「……確かに遅すぎるよね」

新八も、銀時が帰つてこない以上、
神楽を一人にするわけにもいかないといつことで、まだ帰らずに万事屋に残つている。

「新八……銀ちゃんビード油つったネーーー。あんなのやっぱり普通じゃないネーーー。」

「……確かにそうだよ。」

「新八？」

「大丈夫さ。銀さんなら何か考えがあつて動いてるはずだよ

「……だといいアル。」

「え？」

「銀ちゃん、一人でヅラのこと探し回ってるはずだ。銀ちゃんきっと辛いアル」

「……そうだね。だから銀さんは桂を探しているのかもしれないよ。だとしたら大丈夫だよ」

「……ちよつとそこまで行つてくるアル！」

「え？ もう遅いよ？ 何処行くの？」

「コンビニアル！ 酢昆布切れたアル」

「一人じゃ危ないし、僕も行くよ」

「大丈夫ネ！ 新ハは家に残つてるアル。誰もいないと銀ちゃんが帰つてきたとき心配するかもしれないネ！」

「……わかったよ。ちゃんとまっすぐ帰つて来るんだよ？」

「分かつてるアル！」

そう言い残して、神楽は家を出た。

「大丈夫かな神楽ちゃん・・・」

家を出て、軽やかな足取りでコンビニまで来た神楽。

「よし。着いたアル。酢昆布酢昆布～つと」

そしてコンビニの中に入り、酢昆布を買い、買い物を済ませてコンビニを出る。

だが出たところで、見覚えのある人物と目が合つ。

「あ」

「お？」

第六話 声

神楽は「ンビー」に行き、酢昆布を買い、「ンビー」を出たところである人物と遭遇する。

「あ…サドヤロー」

「チャイナ娘か。こんな遅くまで何してるんでイ？」

「夜は変なおっさんいつぱいいるぜイ？」

「お前のことアルか？そつちこな何してるね」

「俺は見回りの帰りに寄つただけでさア。」

「私も酢昆布買いに来ただけアル。じゃあな」

「……待て」

「え？」

総悟に別れを告げて去りうとした神楽を総悟が呼び止める。

「何アルか？」

「……送つてつてやつまセア」

「は？別にいいアルよ？」

「俺は警察でセア。一般市民を危険から守るのは当然だろイ？それに危ないだろイ？」

「お前らはそんなんじやないダロ。…それにお前コンドーリ用があるんダロ？」

「つこでに寄つただけだからここんでセア」

神楽は少し驚いて言つた。

「セレまで言つなら分かつたアル」

「おハ」

総悟は歩き出す神楽に追いつき、一人でならんで歩く。

「サゾ」

「あ？」

「ジハ…ゼハアルか？」

「心配なんですかイ？」

「まあ・・・」

「今のヒルはわからね」

「.....そつアルか」

(…「こいつにだけは嘘つきたくなかったんだけどな）

「旦那が…心配ですかイ？」

「…「つん」

「あの人は幸せもんですねイ。いろんな人から厚い信頼を受けて。」

「え？」

「旦那ならきっと大丈夫でさア。俺が保障しやす」

「なんでお前が保障するワ？」

「そりや…まあ何でもいいだろイ？」

「何だ旦那れ」

「まあ大丈夫つてことでさア！心配すんじやねー。アンタの柄でもないでさア…」

珍しくうな総悟が慰めてくれたことに神楽はびっくりした。

「…なんかお前今日優しいアルな／＼／

「え？」

神楽が小さい声で言つたので、総悟には聞き取れなかつた。

そして、万事屋に着いた。

「！」までアルな。ありがとナ！」

「あ…おひ。じゅあな」

「あと…嬉しかったアルよー」

「え？」

「じゅ あな総悟ー」

「お、おひ」

そして神楽は階段のほうへと向かっていぐ。

総悟はその背中を見て思つた。

（チャイナ、お前は強いやつださア。だから俺はここのじ…）

神楽は

（…あいつ…意外といい奴アルな）

そのと並

「神楽」

「え？」

神楽にとって聞き覚えのある声が耳に入った。

第七話 田村

「神樂」

(……え?)

そのとき、神樂にとつて聞も覚えのある声が聞こえた。

「……誰アルか?」

「……」

声のするせつを見ると、そこは万事屋の屋根の上だった。

「……神威」

(神威?)

総悟には神樂が誰としゃべっているのか分からず、その会話を不審に思った。

「相変わらずだね。」

「何してるアルかお前!」

「ちよつと用があつてね」

「用…?」

神威は屋根の上から飛び降りて、道に降り立つ。

「うん… で？ その人は」

「…お前には関係ないネ」

神威は総悟の腰付近を見て、そして言った。

「ふーん… 間も侍？」

「まあそうですねイ。 アンタは？」

「バカ提督」

「はあ？」

「神威ー！こに 一体何しに…！」

「お侍さんは何処？」

「…お前に教えるはずないネ！」

「我が妹ながらひどいなー」

「お前…！今更どの面下げてそんなことがいえるアルか！家族も捨てたお前が！」

(こいつ… 兄貴か。 一度みたことあらア。 たしか春雨の… つてこと
は)

「お前春雨か。高杉と来やしたねイ。」」に何のよつでイ?」

「な、高杉？」

神楽が総悟の言つたことに疑問を発する。

「うーん…もう知ってるのか。まあ目的といったら…」

そのとき

ヒュン

ガキイイイン！！！

豪快な金属音が辺りに鳴り響く。

「…今のを受け止めるんだ。待つてやつぱりす、じ、じ、せん」

「どうでしょ、うかねイ

ドン！

七
七
!

ザン

二人はもう1太刀交え、そして距離を置く。

「へえ。じゃ、いつのまにか？」

ズガガガガッ！！

持つている傘から弾が発射される。

キンキンキン！

総悟はそれを難なく刀ではじき返す。

「やめるネ神威！サドもアル！」

ブシーブシュ！

だが、すこしずつ弾が総悟にあたり始めた。

（こいつ…夜鬼…）

ドン！

「がつ！」

右手に持っていた刀をはじかれた。

「……ツしまツ…！」

ヒュバ！

「終わり」

ザン！

「……が……あ……」

神威の手刀が総悟を貫いた。

「お侍さん……あの銀髪のお侍さんを殺すことかな

「イ……ああああああああああああああ……！」

神楽の悲鳴が辺りに響きわたった。

第八話 時間稼ぎ

ガラガラー

「神楽ちやん!…？」どうしたの…って沖田さん…」

神楽の悲鳴にいち早く反応してきたのは新ハだつた。

「神楽ちやん! 一体何が…」

「……」

「神楽…ちやん?」

「どうやら意識を失つてしまつたようだね」

「……お前は夜王のときの………」

新ハは神威の手につけてる血を見て、この状態になつた原因を悟つた。

「お前がやつたのか…」

「やつだよ。」

「なぜだ…」

「そいつが邪魔してくるからだ」

「お前は一体何のために…！」

『そこで何をしている！… つて新ハくん… 総悟！』

近藤が真選組を率いて現場に来た。

「一体何があつたんだ!?」

「あーあ……せつかく面白くなりそうだったといふだつたのに。な

あ
阿
伏
兎

『だんぢょー。またあんたの悪こ癖だ。そつやつて敵せん招こちま
うところ直したほうがいい』

もう一方からは第7師団が歩いてきた。

『タマノヒ』

「は……春雨で……さア」

「總悟！ そ、うだ！ 手当てをしねえと……！」

「セイのお侍さんもなかなか察しがいいじゃない そのとおりだよ。

「だけど僕たちはただの春雨じゃない」

「なんだと…」

「早く行つてあげなよ。早くしないとあの銀髪のお侍さん…」

死んだじゃつぬ?」

「な……銀髪の……万事屋かー。」

「ハア……ハア……お前ら……たしか高杉の手の奴か……」

「アリドーリやる。お前は」」で終わつドーリやるのよ。」

「チツ……これはさすがにやべえな……」

銀時は歩いていたところを突然万斬ら鬼兵隊に襲撃され、

応戦していたが、数には勝てなかつた。

「それと……早くしないとあの夜鬼の女の子は

どうなると悪いドーリやるへ。」

「神楽のことか……?」

「神威は妹を春雨に入れようとしているドーリやる。だからつれてい
かれるで」」やるよ。」

「……な……んだと……。」

「今頃はもう神威が連れて行つてこると」」や・・・・・

ダン！

「神楽ア……」

銀時はわき田も振らずに万事屋に向かって走り始めた。

「……逃げたで、」といふが

「よかつたのですか？万斎様？」

「どの道このあと畠介が殺るはずだから手を出すのはこの時間稼ぎだけで充分でござんな」

第八話 時間稼ぎ（後書き）

感想＆評価などあれば是非お願いします！

「万事屋が……死ぬだと？」

「銀さんが……どうして死んだ…？」

「今鬼兵隊の河上と殺つ命つてゐるがどうやないかな？」

「鬼兵隊…高杉の…どうして死んだ？」

「新八君。 今日あの後の調べで分かつたんだが…どうやら奴ら…

手を組んでいるらしい」

「え…? 手を組んでるって…」こつと高杉が?

「ああ。 神威が元老を無視して提督を潰したらしいんだ」

「な…とこいつとは高杉が銀さんを…」

「お見事。 そのとおりだよ。 そしてその情報を集めた彼も見事だつたね」

「……?」

「口つ口に血祭りにあげられてゐるだらうがね」

「…ザキー。 まさかお前らザキまで…」

「どうかな～？？」

「てめえ……！」

ヒュン！

土方が神威を斬りにかかった。

だがそれを意図も簡単にかわしてみせる。

「あともう一つ。その女だけど」

「…」

「前に地球に来た時に、団長がウチの部下を一人殺しちゃったんだ。
だから人員が足りなくてね。その団長の妹に来てもらひう」とになつた。

勝手に団長が決めたんだがね」

「なーふざけるなー神楽ちゃんはお前らなんかにー！」

ヒュン！

スッ！

叫ぶ新八の後ろに回り、首を神威のチョップが襲う。

新八もそれを受け、気絶する。

「君達に拒否する権利はないよ。じゃあね」

阿伏鬼は氣絶している神楽を担ぎ、去る準備を済ませた。

「く！待て……！」

手当てをされていた総悟が、消え入りそうな声で叫んだ。

あとね、俺達はあと10日でこの町……いや江戸を滅ぼすから

「ね、その罠は二つの町にいるから、その前に俺達を探し出して殺さないと

「さて！チャイナ娘を救え！」

真選組が第7師団を追うが、いとも簡単に突き放された。

「いやあね、お侍さんたち

- 46 -

土方が追うたが
モニ第7師団の姿は見えなかつた

江戸を如く

ああ それはサギや万事屋もどこが二でやかるんだ

：！近藤さん！」

近藤は土方に呼ばれ、振り向いた先には、

意識を失った山崎を担いだ銀時が歩いてきていた。

「……万事屋！それにザキ！」

「……神楽は……」

「連れて行かれちまつた……ワリイ！」

すると銀時は何も言わずに辺りを見渡してから言つた。

「話を聞かせろ。入れ」

「ああ」

新八を銀時が担ぎ、真選組が総悟を担架で万事屋に運びこんだ。

万事屋の中。

「まあ座れ」

「すまねえな

「じゅあめんばざ」

銀時が近藤と土方を万事屋に招きいれ、残りの真選組も同じく中に入れる。

「一体ここで何があった？」

「……それは俺も途中からだつたし、最初のまつはわからねえが……

でも分かるのはあの春雨の奴がチャイナを連れて行こうとして、それを阻止じみつと

総悟が戦つたんだろうつてことだ。」

「あとは奴ら10日間での江戸を滅ぼす氣らしく

それまでに見つけて阻止しねえといつてことだ」

「……なるせうな。で……」のあつとまつてわけか

「……そうだな」

新八は気絶、山崎は全身傷だらけで手当されてしまつておつり、

総悟は幸い命はとつとめ、今は眠つてゐる状態である。

「万事屋。ザキを一体何処で…？」

「ああ、俺も鬼兵隊の追跡を回避してきましたんだ。それでここに来る途中に

全身傷だらけで倒れてたこいつを見つけたから担いできましたんだ」

「やうか。それはすまなかつたな」

「べつにいい。それより、神楽は…？」

「……悪りイ。連れて行かれちまつた。

あいつらチャイナ娘を春雨の仲間にしようとしているらしく」

「春雨の…！待て、春雨のどんな奴が来た！？」

「はあ？えーとたしか…傘持つてたから夜兎だとは思つたけど…

「チャイナ服だつたな」

「…！あいつか！」

「あいつ？オイ万事屋。おまえあの春雨の奴のこと知つてるのか？」

「ああ、一回吉原でドンパチやったことがあるんだ。

「そんでアイツは、神楽の兄貴」

「そりゃ。どうりで…」

「チャイナ娘のやつ、氣を失つてたからな。大丈夫だろ？」「

「大丈夫じゃねえだろ。目の前でそいつ刺されたんだろ？」

銀時は総悟を指差して言った。

「ああ。それがどうした？」

「なんでもねえよ。それより総一郎君は大丈夫なわけ？」

「なんか相当やばいように見えるんだけども？」

「ばか。これが大丈夫に見えるか？」

「こいつは戦えねえな」

「ああ。」

「…………だ、旦那ア」

「……総悟！」

総悟が目を覚ました。

「あいつは……チャイナは……神楽は……」

「……あの春雨の奴に連れて行かれちまつた。

しかもそいつは神楽の兄貴だ

「……そうですかい。……田那ア……」

「ああ？」

「……アーツを頼みます。俺はあいつの元までイ……

すいやせん……」

「もういい総悟。寝ていろ」

「…………」

土方の声とともに、総悟は再び眠りについた。

「……なあおい

「ああ？」

「大串君。お前……『10日間待といつ』なんて気はねえよな？」

「……ねえ」

「『リストーカーは……』

「あるわけねえ」

「……今日は寝て、明日から調査だ。とことん探す。

報酬はたっぷり頂くぜ？」

「……なんで俺達の依頼内容がわかつたんだ？」

「お前ら、あいつが騒いでたからきたんじゃなくて、俺に用事があつたから来たんだろ？」

ホントは全部知つてたんだろ？手を組んでたこと。

まあさすがにやつが神楽の兄貴つて事は知らなかつたみてえだつたな

「……まあな。」

「それで……俺達に頼むのか？」

「俺達？……！」

「僕を忘れないでくださいよ」

「し……新八君……」

新八はおきて、部屋から出てきた。

「全部聞いてたのか？」

「沖田さんがあたりからです。」

「さうか。新八君はもう大丈夫なのか？」

「僕はもう大丈夫です！銀さん、僕にも協力させてください！」

「死ぬかもしぬねえぞ？」

「僕は万事屋の一員であり、侍ですから！そのくらいの覚悟は出来てます！」

『死ぬ』といったのにもかかわらず一瞬のためらいもなく答えた新八に

銀時は少し安心の表情を見せた。

「…よし分かった。じゃあ心してついて来いよ？」

「はいー！」

「万事屋。俺達はお前に頼むことにする。

報酬はちゃんと出すや」

「……じゃあ今日はもう遅いから寝るぞ。明日からな。」

時計を見ると、もう深夜1時になっていた。

「じゃあ明日の晩にこいぞ！」

「じゃあな新八君！」

「はー。ねすみなれど藤原さん。」

「邪魔したぜ」

そつこつて総語を拍架で運び、三騎を拍せしめ、真選組は去つていった。

「…明日からですね。」

「ああ。お前も今日は泊まつてけ。早く寝れ。」

「銀さん」

「ああ。」

「桂やこの」とは…

「…あこつのことだ。心配いらねえだろ。」

「…よかったです。」

「ああ？」

「何でもありますよー！神楽けやん絶対に助けましょうー。」

「…分かってる」

「じやあおやすみなさい」

「ああおやすみ」

明日から一人の野望を阻止するための戦いが始まつとしている。

第十話 覚悟（後書き）

感想&評価ある方はぜひお願いします！

第十一話 行動パターン

翌朝。

「銀さん起きてください朝ですよー。」

「…………起きるよ」

「う~えつー~?」

いつもならこの朝の7時という時間は万事屋では誰一人として起きていない時間だった。

だが今日の銀時は珍しく起きていた。

「アハハハ……起きてたんですね銀さん」

「全然眠れなかつた」

「…………やつぱり、僕もです」

・・・・・やつぱり、神楽が心配なのだろう。

* * * * *

朝食を終えて、8時を回ったところでインター ホンがなる。

「おーい万事屋。あたぞー」

「おー入れ」

真選組だ。さすがに昨日とは違い、来て居るのは近藤と土方と山崎だけであった。

「山崎さん。もう大丈夫なんですか?」

「うふ、このぞまだけだね。昨日は本当にびっくりしたよ。」

山崎は片足に包帯をして、松葉杖で歩いている。

「何があつたんですか?」

「まあまあ。こんなとこで立ち話もなんだから入れや

「あ。じゃあ邪魔するぜ。」

土方を先頭に近藤と山崎も万事屋に入る。

「それで山崎さん。昨日一体何があつたんですか?」

「昨日は本当にびっくりしたよ。なんたつて屯所の門の前で普通に見張りをしてたら

突然変な奴が現れて剣を振りかざして来るもんだから。

逃げてたら、今度は後ろのほうから銃で足を打たれて歩けなくなつたんだ。

それで命からがら逃げ出してきたんだけど……途中で歩けなくなつて

ね。

そして旦那に助けられたってことだよ。

「旦那。ありがとうございました」

「ん? いや別に」

「そうですか…。奴らなんでこんなに町の住民を狙い続けるんでしょうか? 土方さん」

「わからねえ。だが確實にいえることは神威と高杉は組んでいるってことだ。」

「この状態はマズイ。奴らこれから何をしでかすか…」

「とにかく…奴らの行動パターンを調べないと…」

「ああ」

山崎がそういうふたとたんに、銀時が言った。

「何ですか旦那?」

「奴らの行動パターンは分かるぞ。おそらくだが」

「なんなんだ? 言つてみろ万事屋!」

「おやうく俺だ」

「俺？…お前がどうした？」

近藤がさういってコラつぽい顔になつて頭を悩ませている。

「要するに奴らは俺を動かす目的で動いてるんだ。

神威は特に俺と戦いたがつてていた。おおかた俺に関係のある人間を傷つけて

俺の闘争心を買おうつてんだろ？

「な…なるほど…しかしながらそんなど分かるんだ？」

「あん時に調査してたの。」

「あん時…ああ、あのファミレスのときか！」

「そう。」

（わうだつたのか。やつぱり銀さんは…）

新八はこのとき少し安心した表情を見せた。

「でもこれが分かったところでなにか奴らの行動パターンが分かるか？」

もうお前に関係のある人物つていつたら…」

「新八、お前家に帰れ」

「えつ？ 何言つてゐんですか銀さん。」

「昨日からお妙に顔見せてないだろ。姉ちゃん心配してゐるから一回
帰れ。

俺らがやつとく

「…分かりました。」

新八は銀時に言われたとおりに万事屋を出た。

「これでいいのか？」

「ああ。」Jの調査に「アイツはやつぱり危険すぎる

「わが義弟を傷つけられないとからな」

「お前の弟じやねーだろ」

「よし。としあえず聞き込みだ。それに万事屋。お前が動けば何か
しらの効果がある。」

「どうこうひとですか副長？」

山崎が疑問を抱く。

「要するに奴らは俺が動き出すのを待つてゐるわけだろ？」

だから俺が動いたことを奴らが知れば動くかもしれないからな

「あらこりうりだ。よし行くぞヨ崎、近藤さん

「おおー。」

「はー。」

「じやこれめすか…」

やつこつて四人は家を出る。

第十一話 調査開始！

万事屋を出て、とりあえず被害の手がかりはないかと町を歩く四人。

「山崎。お前も帰つたほうがいいんじゃないのか？」

「え……そうですか？」

「ああ。怪我人は足手まといだからな。」

「…分かりました」

山崎は土方に言われたとおり、屯所への道を歩き出した。

「これで三人か」

「ああ。じゃあまずはどうする？」

「要是は奴らの場所を知れればいいんだろ？それなら田撃者情報が一番早いんじゃねえのか？」

「よし、まずはそれで行こう」

「大串君にしてはいいこと言つんじゃない？」

「うるせえ。」

「よし行こう。」

近藤と土方と銀時は二舟に別れて、高杉と神威の戦撃情報を探すことになつた。

「こは春雨海賊団戦艦内。

「よつやく動き出したねお侍さんば

「団長の遊び好きにも困つたもんだ。つたくよー…

「晋介様ーーー奴ら動き出したみたいッス！」

「これでぶつかる日も近いぞやるな

「それよつこいの娘目を覚ましませんね…ちやんと寝かせておいたほうがよこ」のでは？」

「先輩。ロココノもたいがここするジス」

「ロココノじやないフリーストです。だいたいね、この年頃の娘はあと2、3年すれば

きつと化けるんですから」

「はいはい。分かりましたよ武知変態ペ」

「変平太です！！」

そうじつてまた子はしづしづいすに座らせていた神楽を担ぎ、
布団の上に移動させた。

「「」苦労だつた。お前らは休め」

高杉は三人にそじつて部屋から立ち去つた。

「……晋介様」

「大丈夫で」ざるよあの男は

「万斎先輩……」

「……銀時イ……早く来い」

第十二話 一枚の紙

恒道館道場。

新ハは自分の家に帰つてきた。

「姉上——ただいま帰りましたよ——」

「……」

「姉上?」

だが新ハが妙を呼んでも返事がない。

「姉上——!—ど!—ですか—!—!—」

「……」

やはり「こへり」呼んでも返事がない。

「何處いつたんだろ?」

ガラガラ。

「なんだろうこれ?」

いつも一人が過ごしている部屋の机には、一枚の紙が置いてあつた。

新ハはその紙を手にとつて、それを見た。

「……………つそだ」

その手紙を見た後、新ハはとたんに表情が変わった。

うそだ！姉上か！！

タツ！・！・！・！

とたんに表情を変えて道場を出て、もと来た道を全速力で駆けた。

「お、お前」

「なんですか？」

最近巷でこの町のものが辻轉りにあつてしるのに知つてゐるな

それは、いて何が知ってる事はないが」

ここはホストクラブ『高天原』

そこで、土方は例の事件について聞き込み調査を行つてゐるところだ。

「はい……まあ確かに知っていますが……」

「それで？なにかないか？」

「辻斬りはありますんが……」

「なににあるのか？」

「こんなことでもよかつたらなんですけど……

昨日から狂死郎さんに連絡がつかないんです」

「狂死郎？……ああこの店の……」

「はい。ここにも来ませんし、携帯に電話しても連絡が取れず困つ
ていました」

「なるほどな……ほかにはねえか？」

「はい……特にね」

「そうか。失礼したな」

土方は高天原を出て、さらに歩き出した。

「失踪か……何かありそうだな」

「一体何が起つていいのだろうか？」

第十一話 一枚の紙（後書き）

感想＆評価などありましたら是非宜しくお願いします。

しかし長々と話が進まなくてすみません。

わたくし自身長年にやつてこいつと戯つてこままで（笑）

ではこれからも宜しくお願ひします！

第十四話 置き紙

「ここはスナックすまこる。

「ここには本人の強烈な希望で近藤がここに来る」となった。

「すこませーん」

「ああ近藤さんですか。どの娘を！」搔かになられまわか～？」

「こやあ 今日せ…」

「近藤さん…」

「ここに現れたのさおつよだつた。

「あー…おつよしきりやん。どうしたんだい？」

「何しに来たの？」

「向しこいつ…やつやあ田舎はーつだろ…

ああでも事件の聞き込み調査をしに来たんだった

「聞き込み？事件つて何？」

「最近この町で辻斬りが多発してこるって言つ事件は知つてこるよね？」

「ええ。 それの聞き込みつていうこと?」

「そりなんだ。 それで何か知つている」とはないか?」

「……知つている」とはないわね。 でも……」

「なんだ? 何か知つているのか?」

「それが……お妙の行方が分からな」とのよ」

「何イ! お妙さんが行方不明! ? ビビリに「う」とだ!」

「わからない…… でも昨日から行方が分からなくて……

家にかけても繋がらなくて…… 弟君もいないみたいよ」

「新八君とは俺も一緒にいたから大丈夫だ。 それでさつき、

お妙さんが心配してくるから家に行つて来いって返したんだが……」

「じゃあ今なら……! 」

おりよつは携帯電話をポケットから出して、 恒道館道場に電話を掛けた。

・・・・・・・・

「……だめ。 弟君も出ない

「なんだつて! ? 新八君は帰つてゐるはずじゃ……」

「近藤さん……どうしたの？」

「決まってる！お妙さんと新八君を捜すんだ！」

「あ…ちゅう…」

だが言う今もなく近藤は店を出て、一田散に走り出した。

「お妙 大丈夫かしら？」

「わかりません。だが心配ですね」

「ええ」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

近藤はもと来た道を全速力で走っていた。

「クソッ……お妙さんの身に何かあれば……俺は……！」

そうさけび、ひたすら走り続けた。

「ノルマを守る事だ……。」

そのとき、勢いよく走っていた近藤が道門で曲がつたところで一人の男とぶつかった。

「いてて…すまねえ！今は急ぐ…て、あれ！？新ハ君！…？」

「ててて…うあ…近藤さん！」

近藤は道で新ハとぶつかり、ぱつたり会つた。

「大変です！姉上が…！」

「新ハ君！何か知つてゐるのか！？」

「はい…やばいんです！実は奴らが僕の家に置き手紙を…」

「そこにはなんて…？」

『志村妙は預かつた。

返してほしければ俺を倒せ

鬼兵隊 高杉』

「…なんだとい…それじやあ…奴らにさらわれたつて事か…」

「どうやらやうです！だから急がないと…！」

「おおー！でもどうして…？」

「わかりません…でも…僕達二人じゃどうにもなりませんから…」

「まずはみんなに事情を話すしかないようだな

「…土方さん…」

その時、土方がそこに現れた。

第十五話 無言

「ひ… 土方さん…」

「トシ…」

新ハと近藤の前に土方が現れた。

「聞いてたのか？」

「ああ。 どうやら今いるまことにしなつてゐるらしいな。」

土方は今までの近藤と新ハのやり取りを聞いていた。

「トシ… やつたりさびしだった」

「ああ。 いろいろ尋たつてみたんだが、ホストクラブ高天原の本城
狂死郎も

失踪している

「狂死郎さんも…？」これは一体…」

「その手紙の内容を見ると、どうやらひつも高杉の仕業と見て間違
いねえな」

「クソッ…！一体どうなつてやがんだ！奴らお妙さんまで…

許せねえ…！」

「落ち着け近藤さん。」じいじはまず万事屋の奴とも会つしかねだらう

う

「クソジ…」

「…なんでこんなこと…」

「とりあえず万事屋を探して会流するんだ」

「ああ」

そして土方を加えて三人になった一行は、銀時を探して歩き始めた。

* * * * * * * * * * * *

「……そつか

「ああお疲れー」

そのころ、銀時は街を歩き回り調査をしていたところだ。

だがその聞き込みの結果は壮絶なものだった。

各地で辻斬りの件数多数。

そして失踪も多々あり。

しかもその被害者はすべて銀時がかつて依頼を受けた」とある人間や、

そうでなくとも何かしら銀時に関わりのある人間だった。

そして銀時は聞き込みを終えて休憩がてら公園のベンチに来たところだ。

「……はあ。奴らやつぱり俺をおびき出すつもりか

そうこいつ空いているベンチに腰を掛ける。

グシャー！

「はあ～……つたく……こんな真似しなくてこいつちから潰しに行つてやるつてのによ……」

そうこいつ足元に有つた空き缶を勢いよく踏み潰した。

誰も見ていなかつたが、銀時の眼は珍しく怒りに満ちていた。

「あ、そこですね銀さん

「新八！お前何で……」

「それは今から話します……」

「まつたくこんなところやがつたか

「お前らもか…」

「一回屯所に来い。話がある」

土方はそれだけ言って、すぐ背を向けて歩き出した。

「…？ああ」

銀時と新八と近藤はそれに黙つてついていった。

屯所に着くまで、四人は無言だった。

第十六話 拠点発覚！？

「」は真選組屯所のなかの、土方の部屋。

そこに四人は集まり、話をしようとしていた。

「」やんのか？」

「ああ」

「大串君。話つて…」

「…眼鏡の姉ちゃんがさらわれたらしい」

「…！…んだと…」

土方の放つた言葉を聞いたとたんに、銀時は表情をこわばらせた。

「…それで僕は近藤さんや土方さんや銀さんに伝えないとと思つて…」

「…そういうことか」

「そのほかにもいろいろ失踪や辻斬りの話があつてな…」

「」ちもだ。それも、さつき言つたとおり俺にかかわりのある人間が集中的だ。

奴ら完全に俺を誘つてやがる。」

「……どうやうせうみたいだな」

その場はかなり重い空気になっていた。

その中、部屋の外からだんだん近づいてくる不規則な足音が一つ。

「……ん？」

ガラガラ

その時、部屋のドアが開いた。

そしてそこには立っていたのは…

「局長に副長に田那に新八君」

山崎だった。

「山崎。どうした？」

「はい。怪我人でも出来る」とはあると思つて。

「できる」と…？」

「はい。奴らの拠点を押さえました

『…………』

山崎が一言を言い放つた瞬間に、四人は一気に表情を変えた。

「なんだとー？山崎！それをどー！」で……」

「はー。やっぱり田撃情報で洗つてみるしかなーって思つて。

それで沖田隊長が隊を動かして総力をあげて調べ上げをせで……」

「總悟ー？あこつ起きてるのか？」

「いえ。さつさく10分ほど起きたんですけど、もうほとんど意識が
はつきりしない状態で……

それで隊に命令を出してから……また寝ました。

やつぱりまだ深刻で……」

「……そつか。あこつ……」

「バーカ。無理しやがって……」

「沖田さん……」

「……やつぱりだな

「え？何ですか銀さん？」

「いひちの話だ。それより、本題に入るが。

その拠点つて言つのは何処なんだ？」

「あ、はいそうでしたね……それは……

『ターミナル』です。』

ターミナル。

そこはこの江戸の地下に流れているエネルギーを原動力として船を動かしたりしている

ところだ。

ここは幕府の重要建築物に指定されており、真選組はうかつに手出しあはれないのである。

だからここも、盲点だつたのである。

「ターミナル！？ そうか。あそこにか！」

「そうか……考えてみれば誰もあそこには行つてなかつたな。

艦隊なんて大体あそこにしかねーつてのにな……」

「ばかばかしいな……」

「ま、まあいいじゃないですかー！ うして場所も分かつたわけです
し」

「それに、たとえ行けたとしても、鬼兵隊の奴らが外の守りを固め
ているんで……」

侵入は大人数でなければ……

「よし」

「はい？」

「決行する……」

「は？ 何を？」

「やる気か……まあそれが一番性に合ってるしな

「俺もハナツからそつするつもつだつたが……」

土方、近藤が次々にしゃべる。

「僕もそういうことなら……」

「分かった。よし、やるか」

銀時たちは一体何を……？

第十六話 拠点発覚！？（後書き）

たくさんのお感想ありがとうございます！
これからもがんばっていこうと思っています！

引き続き、感想評価などもありましたら是非！

第十七話 強行突破

「…………また寝ちまつてたか」

「」は総悟の部屋。

先ほど一回おきたのだが、総悟はまた眠りについてしまった。

まだ、傷はいえでいい。

起きることさえもままならないのだ。

「…………ハア……しゃべる」とも……せつこ……でね？」

いくら急所をはずしていても、わき腹を貫かれては支障は大きいものだ。

「「んなんじや……だめだつてのに……」

ガラガラー。

「……ん……」

そのとき、部屋の扉が開いた。

そこからは土方が顔をのぞく。

「……総悟は大丈夫みてえだ」

「さうか。寝てるか……」

「よし……じゃあ明日だな」

「はい」

ガラガラー

（……なんで寝てるフリなんてしたかな…

まあいいか…）

そうこうで、また寝よひとした。

「おい。俺忘れ物したわ。もどつてとつてきていいか?」

「え?まあいいが…」

銀時はそうこうで逆の方向へと歩き出した。

銀時は、新八や土方や近藤や山崎が行ったのを見てからドアを開けた。

「……総一郎くん

銀時が入ったのは総悟の部屋。

「……」

「寝てるフコは分かってるよ。」

「……田那……ですかイ」

「ほじね

銀時は総悟の寝てゐる布団の隣に座る。

「何ですかイ……俺アこれでも怪我人ですかイ? 気遣つてくださいませエ

「うーん……でも行へつもりだら?」

「……ヤバ?」

「神楽助けに。」

「……なんのこと

「とまけなくともこよ。ぶつちやアレなんじやねエの?」

「アレつて何ですかイ……」

「まあこ ciòを答へたくないな」 ともかくお前は動へるじやねえ
ぞ?」

「……何言つてゐるんですかイ。こんな状態で動けるわけねエでしきう

「……」

「確かにそつだ。まあ安心しin。必ず助けてくる

「……なんだかわからんねえけど分かりやした……」

「じゃあな……」

銀時は立ち上がり、ドアに向かって歩いて歩いていく。

ガラガラ。

そして部屋を出て行った。

「……旦那……ん？」

総悟の枕元に、一枚の紙がおいてあった。

総悟はそれに気づき、その紙を手に取る。

「これは……」

『ターミナルだ』

（うつ……）

その紙を見て、総悟は言った。

「……やっぱ旦那には勝てねえや……」

（うつめらべて見透かされていたようだ。）

気持ちも行動も……なにもかも。

つこむわ。

「え…皆さん。何をする気ですか？」

「そりやあ強行突破に決まつてんだろ？が」

「え…？強行突破つて…でもそれは…」

「じゃあそれ以外に何か方法があるのかよ」

「えつと…それはその…」

「…それしかねえな」

「はー。」

「山崎。明日の昼に隊を全勢力を挙げて動かす。
隊長とともに伝えておけ。」

「一番隊は…」

「俺がこぐ

「は…はー。わかりました。じゃあやつります」

「よー。明日の廻でいになお前」

「はこべ

「はこべー。」

「おおー。」

土方の問い合わせに全員応える。

「よー。あとは總語の様子だけだ。じのあけトイシは戦いに使えないだろいな

「のままやつたらあこひは死んじまつ」

「確かこひだ。あこひは今回もあくまでも使

「…やつもこかねえとももつがじな

銀時が小さく声でつぶやく。

「あ? 万事屋なんか言つたか?」

「なんでもね。それより行くぞ、総一郎君のところ

「え? ああ…」

「おちかつたな。」

「すまぬ。よし俺らはもう帰るわ。」

「ああ。戻をつけてな」

「じや

「わよつなり

銀時と新八はもう出所を出るひじった。

来るべき決戦に備えるべきだ。

「…行つたか。」

「ああ…明日は必ず…

待つてくれ…お妙さん…

「……必ず奴等を倒す

「おおー。」

「銀さん」

「あ？」

帰り道。

「神楽ちゃんや姉上… 必ず助けましょ！」

「…ん？ ああ… もうだな」

新八と銀時は一人並んで帰っていた。

それぞれに思いはあるが、目指すべき場所は同じだ。

第十八話 神楽

同刻。

「……ん」

(何処アルか…二二)

「眼を覚ましたかい?」

「!…!…!…神威!…お前!…!」

「おやおや。静かにしていいと」

神楽が眼を覚ました。

丸1日気絶したまま眠っていた。

「くそ!…何処アルか!…こは!…」

勢いよく起き上がる。

「覚えていないのかい?…昨日の事」

「昨日!…!…」

「…そ、うだ…アイツが…!」

「思い出した?…お前のせいで彼は重症だよ?」

「アレはお前がやつたアル！」

「彼は君を譲りつとしてだから君のせこだよ

「ふざけるなアーッてか！」何処ネー私をどうつかのつもコアルか
！？」

「君は今日から春雨の仲間だよ」

「それせどりつ…」

「だから～君は夜鬼だから地球人と一緒にいちゃいけないって事
だよ？」

「そんなことないアル！私はこままでずっと銀ちゃんや新ハたちと
一緒に…」

「それはまたまだよ？お前は所詮俺達とおなじや

「ふざけるなアーッお前らなんかと一緒にするナ～」

「血は争えないんだつじ。じゃあいのちからおとなしくしても
ひつよ。」

「…何するアルかお前ら…離すアル！」

神威の手下が神楽の手に手錠をはめた。

「じゃあね。お前には奴らとは違うトコロ席を用意したからね。

「ありがたく思いなよ」

その時、神楽の視界には捉えられた百人以上もの人の塊が見えた。

「お前ー！」の人たちをどうしたアルか！…ってアネゴー？みんなー？」

「ここにいる全部銀ちゃんの知り合いアル！…どうこう」とアルか！」

「決まってるじゃない。銀髪のお侍さんをおびき出すためだよ…」

「銀ちゃんをー…ふざけるなー…やらせないアル！」

「無理無理 その手錠は外れないよー」

「クツー…硬い！」

その手錠は夜兔用に作られている特別な手錠だった。

そして神楽は誰もいない牢に入れられた。

「…まあ明日には来るんじゃないかな？じゃあねー」

「待つアル！神威イー！」

叫んだがむなしく、ただ響くだけ。

「…なんでこんなことになつたアルか…」

そのとおり、あの時の記憶がよみがえる。

「……カズやねー……私のやうで……」

神樂は総悟のことを考えてすこぶる心配になつた。

「……」「……なんで私あんなやつのこと考えてるネ！違つアル！私は何にも

だが、口ではそう言えても、心は次第に心配が増していくばかりで
あつた。

……神樂のこねどりには誰もこなく、ただ一つの部屋につけられ
た牢屋といつ

感じだつた。

「なんでこんな暗いところに……いやアルよ。でももう夜も遅いし寝るアルか……」

疲れていたため、神楽はもう寝ることにした。

だが、心配事でまだ寝付けなかつた。

「私は夜兔だから…みんなとは一緒にいれないアルか…？」

私はもうみんなとは……そんなの絶対にいやアル！」

そのとおり、神楽の頭の中にはもう一つの記憶がよみがえった。

「お前さんを見ると兄貴のシラガチラついて仕方ねえ
殺すがいい。その血の命ねえ。」

どれだけ血に抗つたところでお前は結局兄貴と何も変わらねえ。

お前は結局、兄貴と一緒になんだ」

「…私は一体…何アルか」

その記憶が、神楽の心をだんだんと悪い方向へと向かせていた。

「…私がみんなといたら…みんなを傷つけちゃうアル…

そんなの…嫌アル。私もうみんなとはいほうがいいのかもしれないアルな」

そう考えていたら、自然と眠りについていた。

第十九話 決断（前書き）

投稿遅れて本当に申し訳ありませんでした！
少し事情が重なってしまいまして…
では第十九話です

第十九話 決断

・・・・・翌朝。

「……ん」

「眼が覚めた?」

「んん……ってうわー神威! お前何レディーの寝起き勝手に除いてるネ! ?

「別に兄妹なんだからいいじゃん。それより早く出てきなよ」

「…フン」

神楽はそういうながらも神威の言つとおりに外に出た。

「何アルか。今度は何をするアルか

「へんな言い方やめてよ。俺はただ神楽の決断を聞こうとしているだけなんだけどな

「決断つて何アル」

「とぼけちゃ駄目だよ。春雨に来るつて話

それを言い放つた瞬間、神楽の顔色が一瞬変わったが、すぐに答えた。

「…そりゃうだつたアルな。その話なり…」

しばらく間が空いたがついに

「お前らに反抗はしないアル」

神楽は答えた。

「…じやあつこへるとこい」と

「好きに元じる」

神楽の瞳に迷いなどなかった。

「どうしたんだい？」

「何がアルか」

「お前ならもつと抵抗すると思つたんだけどな。連れて行く」と

「…どうせ抵抗したつて無駄アル。それ」「…

私が抵抗すればみんなが傷つくアル。それは嫌アルから…」

「…そりゃなら別にいいんだね」

「勝手にするアル」

「じゃあこくよ。高杉のところへく

「・・・・・」

神威は出口に向かつて歩き始めた。

神楽はそれに付いて歩きながら一つのことを思い出していた。

(…サドヤウー…)

出口が開き、出ようとしたところで一人の第七師団の団員が神威の前に現れた。

「ハアハア…団長…大変です！侵入者が！」

「ん？ 侵入者？ まさかもつ…

どんな奴が？」

「それが…！」

「…あれ？ それって

神楽はそれを聞いた瞬間にその侵入者の正体が分かった。

「アイツ…！…！」

第一十話 悪い癖

その頃、真選組屯所では

「四郎...」

「おーなんだザキか。荒ててどうした?」

「ターミナルでなにものかにによる襲撃が行われています...」

「何...? ターミナルとこいつと高杉たちの艦隊があるところか...」

「はー...どうした...」

「何者かといふのは分からぬのか!...」

「はい! それが確認できなんです!」

「クソ! 一体何が...」

「おー近藤さん...」

「トシビついた? それよりターミナルが...」

「ああ知ってるー。それより...」

「総悟がいねエ...」

「何...? 総悟がいない!... あーつけは寝てたはずだろー...」

「どうかにこなれるよ、うな体じや……」

「とにかく万事屋に電話だ！」

土方は即座に携帯電話を手に取り、万事屋への電話を掛けた。

そうすると予想とは違つての主が現れた。

「もしもし……」

「おまえ眼鏡か？万事屋のヤローを出せー。」

電話を取つたのは新ハだった。

「それが……銀さんがないんですねー。」

・・・・・

しばらく何か話した後

「……何！それは本当か！？」

「はい。じゃあこれでー。」

電話が切れた。

「クソ……なんだった。」

「何だつてトシ？」

「万事屋がいないつて…」

「何！奴は今日のことを忘れているのか？」

「いくらなんでもそれはねえ。眼鏡のヤローが『うには

朝起きたら消えていて、置き手紙があつたつて』ことだ」

「それにはなんて？」

「『俺は救えねえバカを助けに行く』…って」

「救えねえバカ…チャイナ娘のどこか…まさか総悟の奴も…

あのヤロー…勝手に突つ走りやがつて…かつこつけてんじやねえ…」

「うううで言つてもしじうがない…早く行こう近藤さん！」

「アイツだけにいい格好はさせないぞ…」

「や二じやねえ…早く行くぞ…」

「ああ！必ずお妙さんを助けるんだ！」

一人はすぐさま隊員を起こし、出動する準備にかかりた。

* * * * *

ターミナル。

「神威団長！われわれの手ではどうすることも……え？」

アシテ

「ハヤシ」

な：お前何してるや？

その図員にすてに死んでいた

田隣りなハエはいぬないよ それよに

はがなお侍さへの暴走を止めないといふ

- 1 -

（…… ばかねアイツ。 なんで來たヨ。 私のことなんかほつとけばいいアル）

一
長
團
一
長

気がつくと目の前には阿伏兎が立っていた。

そしてその部屋の中を見渡して、

「あらり… あた派手にやつちまつて… あんたの悪い癖だ。

それより地上のほうも派手になつちまつてるみたいだぜ」

「いくよ神楽。阿伏兎。そつちは任せた。」

「了解ですよー」

「な… オイ！」

神威は神楽の手を引き高杉の部屋のほうへ向かつていつた。

* * * * * * * * * * * * * * * *

「ハアアアアア！」

「ウオオオオオ！」

ドタドタ！

「よし行くぞ？」

「ええ」

第一十一話 戰闘開始！（前書き）

しばらく休んでいたことをせんでした

これからはちゃんと書いていきますんで…

第一十一話 戰闘開始！

ターミナル一回、正面玄関付近

「… よう。お前大丈夫か」

「…ええ… なんともないでさア」

「それはねえだろ。そんな体で無理するなって…」

「… 田那ア、それより早く行きやしょ…」

グラッ…

総悟はふりつき地面に手をついた。

「じつかりしる。お前本当に死ぬぞ」

「別に… いんですよ」

「ま、分かってるけど… じゃあ行くぞっ？」

「ええ」

そしてまた一人の前に敵。

「貴様うまい」止める。「…

「うぬせH」

ズシャアアアアアン！

それを一人はいとも簡単に斬る。

「つたく…きりがありやせんね…」

「ああ…攘夷どもだけならまだしも夜鬼は厄介だな…」

「一人ひとりが強い…」

「ウオオオオオ！死ねえ！」

「それに…しても！」

ズシャアアアア！

「ん…ああ…？」

バゴオオオオン！

「！」の敵の数は…ヤバイでさあ…

「先が見えやがらねえな！」

背中合わせになる一人。

「隊長クラスが見当たらぬ…もつと上の階にいるのか？」

「そつみたいでさア。行きやしょう日那！」

「言われなくとも……ウワア……」

ズシャアアアアアアア！

「ハア……ハア……雑魚共が手間取らせやがつて……」

一人の好戦のおかげで、一階の敵はすべて片付いた。

「よし、行きやしょう那……」

「おお

高杉の部屋にて。

「よおじゅじゅ馬娘」

「高杉……」

「いいでいいかなあ？」

「ああ……ちょうどいい」

神威と神楽は高杉の部屋まで來た。

「一階は全滅したみたいだよ」

「… そうか。何人だ？相手は」

「一人だよ。最初はお侍さんだけだと思つたんだけどね」

「… そうか」

「…」

「神楽。君はおとなしく」（…）「でもうつかから」

ガチャ！

神楽は先ほどの部屋と同じような牢に閉じ込められた。

（… アイツ… なんで…）

第一十一話 楽しくなりそうだ

真選組一行。

「よし行くぞー!」

「おおー!」

近藤、土方はもうすでに隊員を引き連れて出発していた。

新八。

「銀ちゃん……やつぱりひとつで……僕も連れて行ってくれれば……」

ターミナル一階正面入り口付近。

「……派手にやつてみようがだな」

ターミナル二階。

總悟と銀時。

「やつぱり敵が多くなつてきてますねイ…」そのままじや

「一人で来ようとしてバカはどこのどいつだよ？」

「……すいせん」

とにかく卑くこちらを近付けて…ウラターハー

۱۵۱

次々と倒されていく鬼兵隊と春雨第七師団。

早くいかねえと……」んな雑魚に呑はねえんでやつ！」

「わが二てゐよ！」

•
•
•
•
•

二階全滅

「よし…次でさア…エレベーターが壊れてるのが厄介でイ…」

「…あんまりしゃべるな。傷に悪い。」

「…ええ」

高杉一行。

「一階ももつやられちやつたみたいだね

「…まあいい。奴らは俺らが倒さないと意味がない。そろそろで
もいいくらいだ」

「まあでもその前に…」

ウイイイイイ…

部屋のドアが開き、数人が姿をあらわした。

「晋介様！ 私行つてくるッスよ！」

「じゃあここは私も参加させてもらひとするで、」

「じゃあここは私も…」

「武知先輩はどうせ戦力になりそつもないんでいいッス。死ぬッス
よ。」

「なー? だれがせんりょくにならないと...。」

「武知。お前は残りの隊員を使ってアツチの雑魚を倒せ」

「あつち?」

高杉がテラスから見た下に、多くの車が見えた。

「真選組ですか」

「ああ。頼む」

「分かりました。」

「じゃあ行つて来るツス!」

「.....」

「イイイイイイン・・・

「...それともう2人入つてきてるみたいだな」

「うん。 そうだね」

「.....楽しさなりそうだ」

第一二三話 一人の青年と

ターミナル三階。

総悟と銀時は上つてきていた。

「…あ、り、や、？誰も、い、ない、ねえ、」

「どうしたんですかね、？」

「ウイイイイイイ…」

すると、同時に部屋の向こうの扉が開いた。

「…？お前は…」

「坂田銀時と沖田総悟ですね… さああなたたちを消しに来ましたよ」

「…武知…ですか？」

「參つたぜ、この人数はさすがに…」

「わあ…早くこいつらを片付けて…」

総悟は胸を抱えてその場にひざまずいた。

「大丈夫ですか？無理もないでしょ？ 神威殿の一撃を喰らつては

なぜそんな手負いでここに来たのかは分かりかねますが…

早く楽にして差し上げましょう」

「お前はここにいる。俺一人で何とかする

銀時は倒れこんでいる総悟にそつと言った。

「俺は……まだ……」

「御用改めであるー」

「！？…あ」

二人が後ろを振り返ると、そこには一人を先頭に大勢の人間がいた。

「まったく…でしゃばりやがって…お前らー…こいつらは俺らに任せろ！」

近藤が叫ぶと、土方も続いた。

「つたく…おい総悟！お前帰つたら始末書だぞー！？」

「…つちい。うるせえな土方コノヤロー…」

「おい！行くぞ！？立てるか！？」

「…大丈夫でさあ…」

ゆっくりと立ち上がり、そして走り出した。

「…まあ本来の命令は「こつらを廻す！」とでしたからね…

では歸る…」

「行くぞオオー！めえらアアアアア…！…！」

そのまた上の階。

「……」

ウイイイイイイ

そして向いの扉が開く音がする。

「…お前らは終わリッス！覚悟…！」

ズン…！

不意に一発の銃弾が飛んでくる。

それを反射的に銀時が木刀ではじく。

「ちつ…はずした！」

「今度は……来島と河上ですかイ……」

「つたくこきなりかよ……」

「あんたらに何の恨みもないっすけど……晋介様の敵は私の敵ツス!…

「だつたら神楽ちゃんの敵は僕達の敵ですよ?」

「な……!?」

銀時たちの後ろには一人の青年と……

「ひりみはきつちつ変えさんとな

聞き覚えのある声の男が立っていた。

「……?お前……」

第一十四話 シラ（前書き）

タイトルからネタバレ…？？www

第一十四話 シラ

「お前は……？」

そこには、見覚えのある長髪男が立っていた。

「ジラア……！」

「ジラじやない桂だ」

その行方不明になっていた男が目の前に現れたときの銀時の顔は、なんともあらわしがたいものになっていた。

「今まで何処に……？」

「とぼけるな銀時。お前は俺がこの程度で死ぬはずないと分かっていたのだろう？？」

桂がそうこうと、とたんに総悟が刀を手に取る。

「桂アー！ 今日これが年貢の納め時……」

グラッ

そう言い放つものの、その後むなしく無残にここに倒れこんだ。

「フン。無理をするものではない。そんなことよつもせずはリーダーを

助けに行くことは先決ではないのか？」

「……チイ…終わつたら必ず捕まえてやるからな…」

その場は一時休戦ということになつた。

その時新ハも言つた。

「桂さん。アナタも人の事いえませんよ？これが終わつたらせつさと病院に

戻らないと…」

「分かつてゐさ新ハ君」

「フン！感動の再開はそこまでッス。行くッスよ！」

「あなたたちの奏でる曲はどんなものなのか…聞かせてもらうでござる」

二人はとたんに襲い掛かってきた。

ダアン！！

また子が銃弾を放つ。

それを新ハが真剣で跳ね返す。

ヒュ…ガキイイイイイ…

万斎が刀をフリをろすが、それを刀で受け返す桂。

「おー…お前、」

「銀さん！沖田さん！早く行って下さー！」こいつらは僕らが…」

「無理だ…こいつらは…」

銀時がそういうかけたが、ふと横を見ると

立ち上がりつて荒い呼吸で歩みを進めよつとしている総悟の姿が眼に入つた。

「…わかつた！絶対生きろ」

総悟の覚悟に負けた銀時は、総悟の隣を走つた。

「…田那…このまま行きやしそう」

「…ああ」

一人はさうに走り出す。

高杉の部屋。

ウイイイイイン...

部屋のドアが開き、阿伏兎が入ってくる。

「だんちょー、俺も出ますよ?」

「うん……いいよ ぶつ潰してきなよ」

神威は阿伏兎の頼みをあつさり聞き入れて、そう返事をした

ガキイイイイイイン！

ズシヤアアアアア！

そこでは真選組と鬼兵隊＆第七師団の死闘が繰り広げられていた。

「……このお掃除が明かな……エジニ」

「なんだ近藤さん！」

「……」は俺に任せた上へ急げ！少しでも総悟の負担を和らげるんだ

「しかし……この敵の数はヤバイだろつ！」

「かまわないさ！俺は絶対大丈夫だ！お妙さんを助けるまで死んだりするもんか！」

「……でも……」

「早く行け！上は相当ヤバそうだ！急げ！」

絶対上に来いよー

近藤に急かされた土方は上へと駆け上がっていく。

上の階へと続く階段。

「… オイ走れるか？」

「まだ…何ともないださ、

「…じやあ急ぐぞー」

もはや、総語の体の心配は少なくなつた銀時。

（もつこれ以上止めたって無駄だらうからな… それだけアイツを…）

「何にやけてるんですかイ？」

「…なんでもない。行くぞー！」

「え？…ええ

…五階。

「…今度は…？」

「もづく…高杉に会えてもいい頃なんですかねイ？」

「… のはずだな

不審にも、その階には前の階とは別な異様な雰囲気があつた。

「…あそこ… Hレベーターあります。」

「…本当だな」

「何のためなんですかねイ？」

「教えてやろうかあ？」

その時、後ろから声がした。

「…お前はあの時の…？」

「覚えていらっしゃったか…」

その声の主は阿伏兎だった。

「そのHレベーターは団長達のいる場所に続くHレベーターだ。」

「…それはどうも親切に」

総悟はそれを聞いた瞬間に少し眼の色が変わった。

「あんたらに興味はあるが…

「団長が銀髪のまつを倒したがつてたしな…」

一人でぶつぶつといい始める。

「だからといってそこの手負いの栗色ヘッドを倒しても面白くないからな……」

「じゃあそこの黒髪の侍に相手してもらおうかな?」

「……?」

「ふと一人が後ろを向くと、そこには土方が立っていた。

「ずいぶんと厄介な奴が相手だそうじゃねえか。

その役は俺が買つ。夜鬼つづーもんと一回戦つてみたかったからな。

「

「大串君お前いつの間に……」

「幽霊が見えまさア……」

「」の期に及んでまだそれを言つが……

「つづーか人を勝手に殺すなつつの!」

「茶番はそのくらいにして……さて始めようかあ?」

阿伏兎が会話に割り込んでくる。

「ああ……」

「土方に借りは作りたくなかったんですけどねイ……」

「つるせーさつさと行け」

「…行くか」

「…ええ」

タツタツタツタツタ…

銀時が急かすと、二人はエレベーターに向かって走り去った。

第一一十六話 近藤勲 vs 武市麥平太

二階。

「ウリヤアアアー！」

「ウオオオオ」

「ドッオオン！」

「グシャアアアア！」

真選組と鬼兵隊＆第七師団が壮絶な戦いを繰り広げている中、

二人は戦場の真ん中に立っていた。

「…派手にやつてくれてるじゃねえーか」

「…そうですね。まつたく野蛮な連中とこいつのは…」

「…お前は違うのか？」

「ええ…私は純然なる…」

「口コロコロヘヘ」

「フヒミニーストです！」

す”に形相で言い返される近藤。だがそれにも動じない。

「…まあいいさ。とにかくお前を倒せばいいんだろ？」

「……そうですね。では始めましょうか？」

ジリ・・・

二人の間にただならぬ雰囲気が現れる。

・・・・

次の瞬間だった。

タン！

タン！

ガキイイイーンン！！

二人の剣が交じり合いつ。

フッ

その場から相手が消えるような錯覚を覚える武市。

「…？…！」

「！」ちだ！」

ズバアアアアン！！

・・・・・

「…今…斬つたと思いましたか?」

平然と剣をかわし、その場に降り立つ武市。

「…思つてねエよ?」

タン!

タン!

ガキイイイイイ!

ダン!スツ!

キイイン!

キイインンーデンーズサアアアア…

眼にも留まらぬ交戦の応酬を見せ、二人はまた距離を取る。

「…おとなしく負けたらどうですか?」

「何言つてゐ。」
「…おなじみ。」

「…やうでしたね。あなたたちにそんな考えはありませんよ?」

「戦いたくないのか?」

「… そうではありません。私は無害なものが傷つくるのが嫌いなだけなんですね」

「… そうか。面白い奴だな」

「 そりですか… でもあなたたちは…」

タン！

ガキイイイインン！

「……私達の害になる存在ですから早めに消しておかねば」

…… そうかよ。確かにその考えには俺達も同感だ。…… か！」

力ギンギン！

ドン！

ズシャアアアアア！

「…ついでにお前、俺達に書をなすつて書のまへつてのま
ま言こ返す、ぜ」

ギリギリ

激しく擦りあつ劍と劍の音が響き渡る。

「…私達も負けるわけには行かないんですね…ここからは本気でいかせてもらいますよ」

「…上等だ」

第一十六話 近藤勲 vs 武市麥平太（後書き）

ここからほんとんど戦闘の話ばかりで内容がありませんが…これで
もがんばってるんでそこはなんとか…

ダッサダサの戦闘シーンですが温かく見守つてやつてください（^_<
0^_>）

第一一十七話 男なら

「では、こちらも本気で行かせてもらいますよ？」

「…上等だ」

「…あなたにこの攻撃が見えますか？」

「…？」

次の瞬間、武市が近藤の視界から消えた。

「…」

ズバアアアアア…！

背中を斬られる。

「…あ…やるじゃねえか…」

「次は首に行きますからね」

「…フン。」

次の瞬間、今度は武市の視界から近藤が消えた。

ズバアアアアア…！

「？」

「……やつを程度の攻撃じゃねるこな。」

「……ぐ。あなたこな……」

「一人はお互に一撃ずつ相手の体に当たた。

「……あなたはすぐこですよ」

「あん?」

「たつた一つの集団と一人の侍とで私達には向かおつてんですか
らね。」

「びつやつたつて勝てるばあが無い」

「……そか。」

「やうですよ。まして晋介に挑もうとは……」

「……たいしたことじやなこさ」

「ですがね……あなたたちの悪運もいるまでですよ?」

「最後に一つ……」

「ああ?」

「びつじてりまでも私達にこだわるんですか?あの銀髪の侍さん

殺させれば人質は解放すると思いますし… そつすればあなた方も満足でしょ」

それをしなかつた… あなたは死ぬべき…」

武市が走り出す。

「…確かに。俺らの目的は第一にして人質の解放だ。

だがな…」

武市の剣が近藤を襲う… がそれを受け止めた。

「男なら…」

そして近藤の剣が

「惚れた女の弟の大切な奴を見捨てるなんて出来るかア…！」

武市を貫いた。

「…うあ…」

ドサッ…

「…まあもつとも… 万事屋が戦つて負けるなんてありえないけどな」

だが近藤もその場に倒れこんだ。

ドサッ…

「すまねえ……トシ……総悟……万事屋。後は頼んだぜ……」

その上の階。4階。

「……観念するツス。」

「そちうじこや」

「眼鏡。アンタなかなか見込みがある。ここで殺すには惜しいツス
よ」

「それはどうも。でもね……

僕は仲間を傷つける奴は許さない。絶対に……」

「……その覚悟と戦いたかったツス。行くツスよー。」

第一一十七話 男なら（後書き）

すみません。少し先週はもう一つの連載のまつに手が回って…

出来るだけ早く更新しようと思ってたのですが…

これからはもっとペース上げられるようにがんばりますので宜しく
お願ひします！

あと、作者が連載してるもう一つの作品「アイス&ドロップ」
も是非ご覧になってください。

オリジナル作品で、出来はまだまだですが…
是非お願ひします！

それでは！

第二十八話 志村新八 vs 来島また子

そのころ、ターミナルエレベーター付近。

「…旦那ア。俺ア…」

「ああ?…どうした」

「その…それが…」

「???」

* * * * *

「…行くッスよ!」

バン!-!バン!-!

キイイン!

「弾くんスか。やるッスね」

「そちうじん…」

バンバン!-!-

(くそ……相手は銃。こちらは刀！いくら攻撃を弾くことはできても

間合いもつめるのは難しいか…！)

そのとき、新八の肩を銃弾が掠めた。

流れる血。

「…危ないところでした。」

「気を抜くと死ぬッスよ！」

「ウラアアアアア！」

新八はまた子と距離をつめた。

「……！」

「喰らえエエ！」

「ゴオオオーン！！

また子の腹をつきが直撃する。

「うあああ…っく…やるッスね」

木刀で突いたから、相手の流血は無い。

だがダメージは少なからずあるはずだ。

「…また子さん。あなたは僕達を怒らせすぎました。

神楽ちゃんのうれし涙以外の涙は…何者にも変えられない！

もつ容赦はしませんよ。」

新八の眼がいつに無く本氣だ。

「仲間を傷つけられて相当頭にキてるっすか…

上等ッス！」

新八は真剣に持ち替えた。

そしてまた子は銃を両手に持つ。

「　「ウオオオオオオ…！」

ふたりが今ぶつかり合つ。

第二十八話 志村新ハヽs来島また子（後書き）

連載中のオリジナル作品「アイス＆ドロップ！」の方も是非見てほしいです！

二次創作ではないので！それだけは言つておきます。
では！

第二十九話 そんな彼女だから

「「ウオオオオオ！！」」

バン！

・・・

「いない…？どこ行つたスか！？」

「！」ちです！…」

ド「オオオオオ！

新八はまた子の頭を後ろから剣で殴る。

「く…どひして真剣で戦つてこないッすか！？」

「人の勝手でしょ？」

「痛い目見ないと分からないうらしいッすね！」

「！？…つづ？」

「もうに喰らつたつすね。それは毒も入つてゐるッス…これで終わりッスよ？」

「ウアアアアアア…！」

新ハは銃弾を喰らつた右肩を左手で押さえ、ひざをあげる。

「…くそ…」

「勝負あつたッスね。その銃弾喰らつて立つてた奴はいないッスよ?」

真剣で勝負しなかったのが敗因だつた見たいっすね」

「…くそ…」

（体がどんびん…何だこれ…）

「…ふつ」

「何がおかしいッスか?」

「敗因?…僕まだ負けてませんけど?」

「…まさか…やつきのを喰らつて…?」

新ハはその場に立ち上がった。

（これだつて精一杯のつよがりだけど…でも僕は仲間を…家族を…

神楽ちゃんを…姉上を助けるんだ!）

「…ぼくが…なぜ真剣を使わなかつたか教えてあげましょつか?」

「…?」

新八は走り出す。

「くツ…止まるツス…！」

バンバン…！

また子は新八へ向けて銃弾を放ち続ける。

しかし新八はそれをはじきながらまた子へ近づく。

「それはですね…僕が真剣で人を斬る覚悟や資格が無いからじゃな
い…」

ただ…」

また子の目の前で剣を振りかぶる。

「死ぬツス！」

バン…！

新八の体を貫ぐ。

それと同時に、新八がその場に倒れこむ。

また子は背を向け言葉を放つ。

「終わったスね。真剣勝負しない奴に用は無いツス…」

「僕の助けようとしている人が…犠牲者が出ることを嫌うからです

よ。

そんな…優しい子なんです。神楽ちゃんは血を求め続ける夜鬼なんかじゃない…

ただの普通の心の優しい女の子です。だから…そんな彼女だから助けるんだ…!!

「…?」

振り向いた時には、そこに新ハガ立っていた。

第三十話 今でも

また子が振り向いたそこには、新ハが立ち上がっていた。

「なつ…まだ…クソ！もうやめるッス！」

「だから…人の勝手でじょうが…」

ヒュン！

「…？」

「終わりだアアア…！」

ドゴオオオオン…！

新ハの両手で放った剣撃がまた子を畳倒させた。

「…クツ…晋介様ア…すみませんッス…」

そのまま意識を失った。

「…それでも…僕は神楽ちゃんを護るために真剣だつてなんだつて使つてやりますよ…」

ドタッ！

新ハもその場に倒れこんだ。

「銃弾喰らひちや……これ以上はせつこです……あとは……」

そして桂のほうを見る。

「あとは……頼みましたよ。桂さん……」

意識を失つた。

・・・・・

「……まさか負けるとは……なんて」とドーンされる

「新八君……」

「でも私はあの人のようにには行かないでござるのよ?」

「残念だつたな。」つちもだ…」

同時に二人が刀を抜いた。

「……一つだけ……聞いていいでござるか?」

「……なんだ」

「晋介は今でも仲間だと思つつか?」

「……どうだらうな」

「まあ……お前を見ていれば分かるで」やるー。」

万斎が跳んだ。

「ふつ……どうだうな！」

桂も跳んだ。

ガキイイインン！！

空中で金属音が鳴り響く。

キン！ガキイイン！

2発、3発と打ち続ける。

「……おぬしら……太刀筋が読めぬ……坂田銀時と戦つた時もそうだった……

その剣……何流でござるか？」

「答える義理は無い……」

「ふつ……いいで」やる。ならば……受けの前に切り捨てるで」やるー……」

二人はそしてぶつかり合つ。

「ふつ！」

ガキイイインンン！！

一人の力はぶつかり続ける。

…おれ…おれの面立つ男でいられるな。戦いのかっこいいれる男

軽快なラッフルのよけで「」をなす

- 15 -

—
! ?

殺那
万歳の視界から桂が消えた

次の瞬間、足もとに影が現れる。

余興に終わった

ひらり

キイイイイイン！

地面に刀の打ちつけられる音が大きく響き渡った。

ガリニードルノウルト・ガ

「セヒドウサガカナ？」

「？」

地面に打ち付けられた刀は、そのまま万斎の装着するヘッドホンへと伸びる。

そして次の瞬間、頭と耳の間を通り抜けた。

丸い物体が宙を舞つ。

ガシャン。

「…」

桂は万斎のヘッドホンを斬つた。

「人と話すときはヘッドホンとれ

その瞬間、万斎の眼の色が変わる。

「…やつてくれたで、」ざるね

「…」

気づいた時にはもう遅かった。

万斎の刀が桂の肩を貫いていた。

そのまま壁に押し切られる。

第三十一話 桂小太郎 v/s 河上万斎（後書き）

また更新遅くなつて申し訳ありません。

第三十一話 言い訳

「ふん…桂…お主なかなかやるでござるな。だが…これで終わりでござる。

前は坂田銀時にやられたが、貴様で敵討ちをさせてもいいでござる」

万斎の持つ刀が桂の肩を抉る。

「チツ！ フン！」

桂はすかさず刀を持ち替えて、万斎へ斬りつけた。

「…！ クツ！」

タン！

万斎は後ろに下がった。

「貴様…銀時に負けたか」

「…それがどうしたでござるか？」

桂の肩からは血が流れ落ちる。

「…それをこの俺で敵討ち？ フフフ…ハハハハハ！ …！」

「何がおかしいでござるか！」

「いやあ……貴様銀時に勝てなかつたのを言い訳に俺と戦つたのか？」

「言ひ訳？なんの」といひやうる

「しょせん貴様は銀時に勝てるわけなどないのだ。」

「なつ……」

万斎は何も言わない。

「まあ……とにかくだ」

「何を……」

田の前からはすでに桂は消えていた。

「……？……つ」

桂は万斎の背中に背を向けて立つっていた。

そして刀を鞘に納めた。

「ぐー……ツツアア！」

辺りに飛び散る、血。

その声はもう声になつていなかつた。

第三十二話 敗因

「ハア…ハア…ツクモ…」

「どうしたい？ つまんないよ？」

ターミナル五階。

阿伏兎と土方。

「…ハア…チイ…ふざけんなよ…」

阿伏兎は左腕一本を失っている。

土方は… 全身を血まみれ。

しかも、阿伏兎の腕は土方の斬ったものではない。

夜王に斬られたものだ。

「あーあ… まだチャイナ娘のほうが手こたえあつたなあ… ヘッドホンが相手してるとか

いつやつと変わつてもうおうかなあ…」

「クソ！ 犯めやがつて！」

土方は斬りかかる。

* * * * *

一
散
れ

ビシヤアアアアア！

朝日口にも二太刀

さふに辺りに血が升ひ散る

貴様の照因は俺を舐めたことだ

トタリ

万斎は完全に意識を失った。

＊＊＊＊＊

六階に続くエレベーター。

7

「おいお前：少し休んでろ」

「……すこせせん……」

銀時と総悟はエレベーターの中で座つていた。

静かな気配。そこで総悟は均衡を破るよつて言葉を発する。

「……旦那ア。俺ア話があるんでやア……おつとせや合つてもやりや
ないですかイ……」

「なんだよ。言つてみろ」

第三十四話 理由

「俺が…なんでこんな手負いでここまできたか…もつ分かってるんでしょ」

銀時は言葉を発しない。

「オレア…神威のヤローを倒す…とか。高杉を…攘夷浪士どもを叩き潰す…とか。

そんな理由できてないんでしょ。俺アただ…」

「……」

ひとつ、間が空く。

「俺がアイツの」と…スキなだけなんでしょ」

「……」

「田那ア。」こんな理由で来るんだわ。俺アバカでしょ」でも…

あいつとの時間だけは護りたいんでしょ…」

すいやせん。こんな時にバカなこと言つちまつて。

でも、俺は…アイツを助けるために…ここに来た。

それだけは聞いといてほしかったんだし…」

総悟が、銀時のほうに顔を向ける。

すると銀時は言った。

「… そうか。」

ただ。それだけ。

「旦那ア…？」

「行くぞ。」

そして、エレベーターが開く。

* * * * *

ターミナル五階。

「お~お~。歯ごたえなさすぎるぜ黒髪の兄ちゃん~もひょつと
マシに戦えないのかあ?」

土方は両肩を重そうにぶら下げ、その右手には刀が握られている。

「チイ…夜鬼…化け物かこいつら…」

「人生はなあ…選択肢の連続。アンタはそれを間違えたのさア!」

土方の体が浮き、土方の背後の壁に体をたたきつけられる。

「クソお……奴に勝つ手は……！」

第三十五話 かばいながら

壁にもたれかかった土方は辛そうな息を吐いていた。

「…グ。 てめえ…」

「だめだめそんなんじや。 もつと楽しませてくれないと。

まあ俺は夜鬼の讓ちゃんには手を出せないけど地球の野蛮人には手を出せるからね」

「……まだ…まけてねえだろ」

土方は重い体を立ち上がらせる。

「…て、めえ…俺はまだ…だ」

「がんばるのはそのくらいにしどきなよお…おじさん飽きちゃった
あ～」

「くそ…ウラア！」

刀を阿伏兎の頭めがけて振り下ろす。

阿伏兎はそれを傘で容易に止める。

「あんたア…もつりよつと歯ごたえのあるやつだと思つてたんだけ
どねえ…

「やつかったの？」

「ハハハセエ…」

確かにやつである。いくら相手が歴戦の夜鬼民族だからといって、あの鬼の副長ともやつ

ものがやつの奴にやつ簡単には負けるとは思えない。

「…もしかして…？なにかをかばつて戦つてる？」

「……」

亞伏鬼は土方に問いかける。まるで赤子に問いかけるかのよつ。

だが土方はそれに答へよつとはしない。

「……どうせ死んだら分かるんだよ？早く言つつけたまつが身のためなんぢやない？」

「ハハハセエ…」

土方は剣を握る手にわらに力をこめた。

「オオオオー！」

「…一つおつヒー！」

土方の剣は亞伏鬼に命中しそうだといつといつで外れた。

「…遅いね。隠してないで叫んでみなよ?夜鬼を「」まかせなことでも思ったかい?」

「もなこと群…死んじゅうみ?」

その時、土方は後ろへ下がった。

「…なごのつもつだ?」

「…教えてやるよ」

「ああ~」

「俺のやつたことはなあ…」

「ベー…ベー…」

その時、室内にサイレン音が鳴り響き始めた。

「なんのまねだい!」りやあ

「何のことばねえ…ただのゲームぞ」

『システム、ロック解除。』

「これよつ、緊急モード、作動します。』

第三十六話 大掃除

「おーおー…なんのまねだあ？」

部屋にはサイレン音が鳴り響き、地面が微妙に地響いている。

「やつとか…つたく遅いぜ。」

「おー黒髪ー！」つあなんの真似だ！」

『ロック解除完了』。ただいまより、

『大掃除』を開始いたします』

「よし…始まつたか」

「つー何を…！」

「…」

そのとき、阿伏兎の周りの床から数体のからくりが出てきた。

「…なんだこいつらは」

「やるじやねーか…平賀源外」

「そいつは確かあ…以前高杉の奴が標的にしたつて言ひ…」

「知つてゐんじゃねえか。なら話は早い。」

「だからどうしたっていいんだあー」この人間みてえな奴らが奴の作
つた

おもちゃだつてのか！？』

「つつ…ハアハア…ああ。そうだ。』

『じ主様。じ指示を』

「奴を…殺れ」

『了解しました』

数体のからくり型の人間兵器は、いつせいに阿伏兎へ襲い掛かる。

ものす』』速さで動いている。

「クソ…速ええ…」

「……倒せそつか？」

『夜鬼の戦闘』データを捕捉完了』

『とるに値しません』

それを聞いた阿伏兎が、叫び返す。

「ハツ！舐めやがつて！速さなんてどうにでも補えるってんだよー！」

一人のからくりが、阿伏兎に向けてレーザーを放つ。

「つちー。」

隙をついて、残りの全部がレーザーを放つてくる。

それも適度な時間差で。

「つ…あ！小賢しい！…おい黒髪！てめえなぜこのシステムをはじめに作動させなかつた！？」

「システムの作動条件だ」

「ああ？」

土方の言つた言葉に阿伏兎は意を唱えた。

「簡単に言つとだな、このシステムは侵入者の排除だ。

源外のシステムは利口でな。一人以上の生体反応を捉えた場合、どちらが敵かを

血の色で予測するんだ。俺たち真選組はあらかじめ源外のおっさん
に血を抜いてもらつて

機械に設定してあつたんだよ。

だから再びこの部屋で俺らの血が流れた時、それ以外の生体は反乱分子だとみなされるんだよ。

まあ特定の場所で地面にふれさせなきやだめらしげがな。それは知らなかつた

「くそお……てめえわざと負けてやがつたか…」

阿伏兎は今になつて土方の策にはまつていたことに気づく。

そこで、からくじの攻撃はさらに加速する。

「くつ…」

『システムクライマックス。大掃除モード。

最終段階に移ります。』

「なめるなあああ！」

「つづああああ！」

全からくりが一気に大きな光を放ち、阿伏兎へと襲い掛かる。

土方は静かに阿伏兎に背を向ける。

そしてうしろで激しい轟音ともに広大な光が輝いているのを感じて、
いた。

「すまねえな。俺はお前と戦いたかつたが…

もう一人バカを相手に仕事しなきゃなんねえんだ。

』

第三十七話 言葉にならない

ターミナル最上。

銀時と総悟。

二人がそこへ着いた時、すでに一人の男が待ち構えていた。

「やあ 待つてたよお侍さんたち

その男は笑顔で。

「すいぶんと遅かったなあ

そして優しい声で。

「じやあ行こうよ。ここでやりあうのもなんだしね

しかし、それとは裏腹に、彼の放つオーラはまがまがしく、そして黒い。

銀時は思い立ったように口走った。

「神威つづったな。てめえどうしてそこまで俺にこだわる

その唐突な質問に、神威は即座に答える。

「やつやあ…俺は強いやつにしか興味が無いからだよ

「……神楽は弱いんじゃなかつたのか？」

「今は、ね。でも、アイツを強くするのは俺だよ」

その言葉に、銀時の後ろに立つ総悟が反応する。

「……ひ。てめえ……」

「なんだい？」

「……」

総悟は何かを言おうとしている。

しかし、怒りが言葉にならない。

「さて……そ」の侍さま。君にはどうでもいい。僕はその銀髪のお侍さんには

用があるんだからさ」

銀時はそれをきいて少し顔をゆがませる。

「……沖田。」

「……なんですかい？」

「……奴と戦れるな？」

その急な質問。それはただその言葉の意味だけをあらわした言葉で

はなく、もつと

深いものがある気がした。

「……そのためここへ来たんだから。出来ない分けないでじゅう？」

だが、あえてそこには触れなかつた。

それを聞いて銀時は安心した様子で、総悟を指差し神威へと叫ぶ。
「ワリイな。お前の相手はできねえ。まあこいつを倒すことが出来たら

考えてやつてもいいぜ！」

俺はそこのバカを相手にしなきゃいけないからな

神威の背後の廊下の壁には、もう一人、強い眼をした男が立つている。

高杉晋助。

「あれ？ もう来てたの？」

「やつは約束だ。ワリイがそいつは俺がもうやせ。」

「じゃあしょうがないかあ

そこつぶつ殺してさりと銀髪のお侍さんの相手にしていく

「やつてみやがれい」

神威はおもむろに部屋のまわりを回り、手をかざして扉を開ける。

「通路が汚れると面倒だからね。個室で相手するよ。

あ、安心して。眼なごて無いかからや」

本当に無い。

それは神威の性格から考えて、なにであらう。

「上等でや」

それだけ発して、総悟はやうへ入るひたすら。

「おこ」

銀時が沖田を呼ぶ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7976u/>

銀魂～最強の二人～

2011年12月27日19時45分発行